SCJ

Newsletter of Save the Children Japan

特集

東北の子どもたちとの5年間

国内事業 ― 熊本地震 緊急・復興支援

海外事業 ― ミャンマー 子どもの保護



Vol.69
Sep. 2016

Save the Children JAPAN

東北の子どもたちとの5年間

東日本大震災
緊急・復興支援の歩み

東日本大震災の発生直後に東北で活動を始めてから、セーブ・ザ・チルドレンは、常に子どもたちに寄り添ってきました。5年の活動を通じて改めて感じた子どもたちの力、そして私たちがこれから続けていく活動への思いを、国内事業部副部長がお伝えします。



5年で、のべ約188万人へ

2011年3月11日。あの日、小学校の卒業を控えていた子どもたちは今、高校生活の最後の1年を過ごしています。

「人がたくさんいて落ち着かない」「遊びたいけど、おもちゃも場所もない」。震災から3日後に東北入りした私たちが目の当たりにしたのは、大人と同様に〝避難所〟という非日常に不安を抱え、戸惑う子どもたちの姿でした。

「一刻も早く、子どもたちが安心・安全に過ごすことのできる居場所をつくらなくては」との思いから、3月16日には最初の「こどもひろば」を仙台に開設。その後、岩手・宮城県の計19ヶ所の避難所でも開設し、運営を行いました。学校再開後は、学用品の配布、給付型奨学金の提供のほか、子どもたちの放課後の居場所である放課後児童クラブ（学童保育）への支援、子ども参加によるまちづくり事業、放射能リテラシー事業、地域のNPOへの支援等を通じて、この5年間で、のべ188万人に支援を届けることができました。

子どもには力がある

復興支援の一つとして、私たちは、東北の子どもたち自身がまちづくりに取り組む機会を提供してきました。行政や地域住民とも話し合いながら、公益施設や復興のモニュメントをつくり、時には自治体や国に自らの思いや意見を届けてきた子どもたち。

「今まで以上に自分の住むまちが好きになった」「自分の意見や気持ちが少しでも伝えられるようになった」「復興は大人の仕事という、以前の私の考えは180度変わった」と語っているように、子どもたちは地域への関心を高め、意見表明や他者の尊重、社会参加の大切さに気づき、地域の一員として復興に向けて歩んでいます。



東北の子どもたちとともに活動する中で、子どもはただ支援されるべき対象なのではなく、自ら被災という現実を乗り越え、復興の主体となることができる力があることを改めて実感しました。

子どもたち一人ひとりが声をあげる機会や、社会に参加する機会を提供し、子どもに寄り添い、声を聴き、その声を反映する。大人や社会の役割が問われているのではないでしょうか。



子どもの権利の実現に向けて

一方で、私たちは給付型奨学金などの支援を通じて、貧困の問題に直面する子どもたちが数多くいることも、改めて認識しました。現在、国内では6人に1人の子どもが相対的貧困下にあると言われているほか、子どもへの虐待の相談件数も年々増加し、生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」は、十分に保障されていないのが現状です。また、熊本地震のように、今後国内で大きな災害が起こるかもしれません。私たちは、これからも子どもの貧困問題の解決や子ども虐待の予防を中心に、子どもたち一人ひとりが権利の主体者となれるよう、活動を続けていきます。

（国内事業部
副部長　津田 知子）









緊急から復興へ―。子どもたちとともに歩みました。











子どもたちの声を聴きながら、復興への取り組みを進めました。

教育

学校再開に伴い、学用品の配布や給食の補食支援を実施。また、教育の機会が確保されるよう、給付型奨学金の提供や、部活動・課外活動への支援を行いました。



奨学金があったことで、資格に挑戦できました（高3）

福島

比較的空間線量の低い地域で、外遊びの機会を提供。また学校で、放射能について学び、自ら判断する力を養うワークショップを実施しました。



皆の違う意見が聞けて、納得と驚きがあった（中3）

防災

学校・学童保育などへ防災用品を配布。防災教育教材の開発、研修の実施や防災イベントなどの支援を通じ、学校と地域が連携した防災の取り組みを推進しました。



地域の防災訓練に積極的に参加したいです（中3）

子どもの保護

安心・安全に遊び、学び、成長できるように。学童保育施設や公園など、子どもの居場所を整備したほか、研修を通じて、学童保育の質の向上を支援しました。



広い！早くこのお部屋で友だちといっぱい遊びたい（学童保育に通う小学生）

コミュニティ・イニシアチブ

地域のNPOが子ども・子育て支援活動を継続できるよう、資金、組織基盤強化、子どもの権利普及の側面から支援しました。



地域に根差した組織として続ける基盤ができました（NPOスタッフ）

子どもにやさしい地域づくり

子どもたちが復興の主体となることを目指して。行政や地域と連携して子どもたちがまちづくりに取り組み、政策決定者に提言できるよう、子どもたちを支援しました。



まちづくりに参加することで、自分を変えることができました（小6）

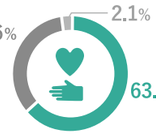
数字で振り返る 東北の5年間

4,451人
農業・水産高校計29校の生徒に給付型奨学金を提供しました。

3,390人
ランドセルなど学用品を3,390人に届けました。

23施設
公園や学童施設などを建設・整備しました。

7,600,000,000円
国内外から約76億円のご寄付をいただきました。



のべ188万人
のべ約188万人の人々に支援を届けました。

200人
計200人のスタッフが、緊急・復興支援活動に携わりました。



19ヶ所
岩手・宮城県で、「こどもひろば」を開設しました。

733団体
子ども・子育て支援NPO 733団体へ助成を行いました。

48,000人
岩手・宮城県で実施した4回の意識調査にのべ約48,000人の子どもたちが回答しました。



6つ
石巻の子どもたちがデザインした児童館が、6つの賞を受賞しました。

山田町ふれあいセンター オープン！

ここからが、新たなはじまり

岩手県山田町で7月2日、セーブ・ザ・チルドレンの支援により、子どもたちが行政や地域と連携し、企画・デザインした公共施設「山田町ふれあいセンター」がオープンしました。開所式に続き、当日はイベントも開催。本の読み聞かせなどのほか、子どもまちづくりクラブが企画した施設内オリエンテーリングやカルタ大会も実施され、350人以上が訪れました。「今日で終わりではないです」「もっといろんな人にセンターを知ってもらい、利用してもらいたいです」―。前向きな子どもたちの姿を頼もしく感じた1日でした。





熊本地震

緊急・復興支援レポート

セーブ・ザ・チルドレンは、地震発生翌日の4月15日から被災地に入り、子どもたちや保護者のニーズ調査にもとづいた緊急・復興支援を継続。約14,000人に支援を届けています。

4月14日 前震発生

15日 ニーズ調査を開始

震災翌日に現地入りし、物資支援の提供を開始



子どもや保護者のニーズにもとづき、7大アレルゲン不使用の離乳食やおしりふき、母乳パッド、ぬいぐるみなどの物資を提供。また、「子どものための心理的応急処置」に関する特設サイトを開設しました。

4月16日 本震発生

避難所に「こどもひろば」を開設

熊本県益城町の避難所に、子どもたちが安心・安全に遊び、日常に近い生活を取り戻せるよう、「こどもひろば」の開設を開始。のべ約2千百人の子どもたちが参加。



VOICE

「こどもひろば」に参加した子どもの保護者

私たち家族は車中泊の避難生活をしているのですが、子どもは「おうちに帰りたい」と泣くこともあります。そんな状態の中で、この「こどもひろば」があるのは本当に助かります。ここに来ると楽しんで遊んでいて、戻って来ると、「折り紙したよ！」と嬉しそうに話してくれるんです。

2016年4月



5月

16日

学校給食への支援を開始

給食センターが被災しパンと牛乳のみとなった簡易給食に、チーズやゼリーなどの補食メニューを支援。6月以降は弁当給食の費用の一部を支援し、保護者の負担を軽減しています。益城町の全公立小中学校が対象で、年度末まで実施します。



6月

25日

防災ずきんなど、防災用品の配布を開始

非常時の備えを強化して安心・安全に過ごせるよう、益城町や御船町など5町1村で防災用品を配布。幼稚園、保育所、小中学校、学童保育にて、防災ずきんや非常持ち出し袋などを提供しました。



VOICE

益城町立飯野小学校 柴田敏博校長

防災ずきんをいただき、ありがとうございます。この防災ずきんを避難訓練でかぶることで、子どもたちの安全に対する意識や防災意識が高まります。自分の目で見て、自分の頭で考える。そんな子どもたちを育てていきたいと思います。

2016年5月



1日

運動着や学校備品などの提供を開始

震災前の学校生活を取り戻せるよう、益城町の小中学生を対象に、震災で着られなくなった制服や運動着・水着を配布。また、体育や部活で使う運動用品、エアコンなどの備品を支援しています。



3日

学童保育の指導員向け研修を実施

震災により、子どもや保護者の生活環境が変化する中、その役割が大きくなっている放課後児童クラブ（学童保育）の指導員に対し、専門家による講義や指導員同士の意見交換を通じた研修を実施しています。



7月

8月

中学3年生対象の給付金を支給開始

震災の影響により、夏休みの学習やスポーツ活動などに支障が出ないよう、益城町の公立中学3年生に在籍し、住宅が一部損壊以上など、一定の条件を満たす生徒計262人に対し、1人あたり5万円を給付しました。

10・11日

「子どもまちづくりリーダーツアー」開催

益城町をはじめとする県内の小中高生30人が、復興に向けたまちづくりについて考える機会を提供。作成した「夢のまちプラン」は後日、子どもたち自ら、町長はじめ行政や地域住民に向けて発表しました。

今後も、給付金の提供など、現地のニーズに沿った支援を継続します。

※支援内容は2016年8月時点。

ミャンマー

紛争後の村で、住民が子どもを守れるように。





民主化後も子どもたちは・・・

ミャンマーでは今年の春、民主化を掲げる国民民主連盟による新政権が誕生しました。長く軍事政権下にあったミャンマーの人々は、新しい政治に大きな期待を抱いています。しかし、長年にわたった内戦や一部で続く戦闘の影響で、多くの子どもたちはいまだ保健サービスや教育を受けられない状況にあり、虐待や児童婚なども問題になっています。貧困のため、子どもが学校に行かず働いたり、軍や武装勢力に徴兵されたりという事例も、後を絶ちません。



支援グループが始動

そこで、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは2013年、ミャンマーでも最も戦闘が長く続いたカレン州で、子どもの保護事業を開始。村人10～20人程度で構成される子ども支援グループを34の村で立ち上げ、村全体で子どもを守るための体制を作りました。活動では、文字の読めない村人にも分かりやすい教材を使い、子どもの権利や保護、暴力のない子育ての重要性について啓発。また、身体的虐待が判明した場合、子ども支援グループが病院に搬送し、適切な治療を受けられるようにするなど、子どもたちを脅かす暴力や搾取の問題の解決に取り組みました。

村人からは「子どもと話す機会が増え、暴力が減った」、「子どもに危険な仕事をさせないようにするようになった」といった声が上がるなど、少しずつ、子どもにとって安心・安全な社会に改善しつつあります。政治、経済環境が大きく変化しているミャンマー。私たちは、今後もカレン州での子ども支援グループの活動を支えていきます。

（ミャンマー駐在員　西口 祐子）

毎日使うマグカップで啓発



「子どもの権利を実現するために、力を合わせましょう。」



G7伊勢志摩サミット報告

G7首脳に、市民社会の声を。

より脆弱（ぜいじゃく）な立場にいる人々の視点が反映されるように。

世界で最も豊かな国々の首脳が年に一度集まり、世界の課題について対処方針や公約を発表するG7サミット。国際政治・経済をはじめ、途上国開発や環境への世界的な取り組みに大きな影響を与えます。そのため、これまでセーブ・ザ・チルドレンを含む世界の市民社会は、サミットに注目し、議題や合意内容に、より脆弱な立場にいる人々の視点が反映されるよう、さまざまな働きかけを行ってきました。

G7首脳はヒーローになれたか？

2016年5月のG7伊勢志摩サミットは、2015年9月に世界が合意した「持続可能な開発目標」（SDGs）の採択後、初めてのサミットでした。このため、議長国の日本を含むG7首脳が、この重要な目標に対し、いかにリーダーシップを発揮するかが注目されました。

国内外のNGOなどと連携しながら、セーブ・ザ・チルドレンでは、保健・栄養の分野を中心に提言活動を実施。特に、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC―すべての人が経済的困難に陥ることなく、必要とする保健サービスを受けられること）、子どもの栄養改善、そしてSDGsの実施を求めました。



「G7首脳が保健格差をなくし、全ての人の健康を実現するヒーローになるように」との思いから制作した、各国首脳のパネル「UHCスーパーヒーロー」は、多数のメディアに取り上げられました。

しかし、最終的に発表されたG7首脳宣言は、具体的な行動計画に欠ける内容が多いものでした。このため、セーブ・ザ・チルドレンを含む市民社会のネットワークは、話し合われたほとんどの課題について、5段階中の2か3の評価を下すことになりました。市民社会の声が、世界の議題に反映されるよう、来年イタリアのシチリアで開催されるG7サミットに向けた動きが、すでに始まっています。



SCJからのお知らせ・メッセージ

SCJ広場

＼ スタッフの1日 ／



洪水などの被害が多いウガンダで、防災事業に取り組んでいます。子どもの力を引き出し、子ども一人ひとりが少しでも子どもらしく過ごせることを目指して、保護者や地域社会と協力しながら活動しています。

ウガンダ駐在員　**不破 麻理子**

ウガンダってどんな所？

赤道直下の国ですが、首都カンパラは、まるで夏の軽井沢のようにさわやかです。一方、事業地のカセセ県は、雨季でも涼しくならず、年中暑いことで有名です。田舎にはゾウが来て、畑を荒らしてしまうことも！



06:00 起床
07:30 出勤

ウワバチーレ！（おはよう！）（ウガンダには50以上の言語があります）

07:45 勤務開始

お茶を片手にオフィスを一周、みんなにあいさつしてから朝の仕事が始まります。パソコン業務を済ませ、チームがそろったら、車で40分ほどの事業地へ。

「予定通りに進んだ？」

09:30 会議は外で

村の防災対策委員会との会議では、メンバーが立てた防災行動計画の進み具合を振り返ります。やる気と誇りにあふれるメンバーの様子を見ていると、頼もしく感じます。





13:00 村唯一の食堂でランチ

この日は主食の「マトケ」（バナナのペースト）に豆や肉、魚のスープをかけた料理をいただきました。おいしい！

「子どもを洪水から守るためには？」

14:00 工事現場で協議

県の担当者と合流し、洪水被害のリスク軽減のために工事をする現場を視察。エンジニアから説明を受けつつ、今後どのように工事を進めていくか協議しました。



19:30 帰宅

同封の封筒でお送りください

集めて、送って、気軽に支援



買いすぎて余ってしまった年賀状や、書き損じて未投函の官製はがき、未使用のテレホンカード、商品券や切手。これらをお送りいただくと、換金のうえ、セーブ・ザ・チルドレンの活動に役立てられます。是非、同封の専用封筒でお送りください。



2015年12月～2016年5月に、皆さまからお送りいただいたはがきや切手などは、1,518,018円の活動費になりました。あたたかいご協力に感謝いたします。

街頭キャンペーンを実施中！

セーブ・ザ・チルドレンの活動を多くの方に知っていただき、支援にご協力いただくための街頭キャンペーンを実施しています。海外の医療設備の整っていない現場で使う安全出産キットや、栄養不良の子どもたちへ提供する栄養治療食なども紹介しながら、スタッフが直接、活動内容をご説明します。駅や店舗など、街角で見かけたら、気軽に声をかけてくださいね。



パートナー企業をたずねました

PARTNERSHIP INFORMATION

パートナーシップインフォメーション



阪神大震災の経験をもとに、迅速な支援で社会に応える

Ｐ＆Ｇジャパン株式会社
執行役員 広報渉外本部
クリント・ナバレス 様

セーブ・ザ・チルドレンのグローバルパートナーとして、国内外の活動にご協力いただいています。熊本地震では、紙おむつや生理用品などの緊急支援物資や、熊本での活動全体を支えるご寄付をいただきました。

「1995年に起きた阪神大震災では、神戸の本社に加え、紙おむつなどを製造している主要な工場が損壊しました。しかしそんな状況でも、赤ちゃんにおむつが必要なことに変わりはありません。交通網がまひした中、私たちはバイクでおむつを工場から町に運びました。その経験から、社会のニーズに応えるために、災害時迅速に動ける体制を整えています。それが、いつも商品を使ってくださる消費者への責任だと思っています。4月に熊本で地震が起きた際も、社員からすぐ、『私たちにできることをしなくては』と声があがりました。そしていち早く、セーブ・ザ・チルドレンを通じての支援を始めました。長年のグローバルパートナーとして信頼していることはもちろんのこと、誰よりも早く、意義のある活動をしていたからです。物資による支援のみならず、子どもたちが過ごすスペースづくりや、以前のような学校生活に戻れるようにするための支援はとても大切です。日本をはじめ世界各地で、共に活動できることに感謝しています。」



パートナー企業のお知らせ

YAHOO! JAPAN ネット募金

インターネット募金で寄付をもっと身近に

国内最大級の寄付サイト「Yahoo!ネット募金」では募金ページを通じて、国内外のさまざまな緊急災害活動や子どもたちへの人道復興支援をご支援いただいています。熊本地震では、震災直後からの支援呼びかけにより、約13,000人の方から1,600万円を超えるご寄付とともに、たくさんの応援メッセージをいただきました。



LOVE&PEACE PROJECT from haco!

「ラブ＆ピースプロジェクト2016」で熊本の子どもたちに笑顔を

株式会社フェリシモは、9月11日からショッピングサイトZOZOTOWNにて、女優でモデルの高橋愛さん、タレントのスザンヌさんがデザインした「haco！（ハコ）」ブランドのファッションアイテムを寄付金付きで販売。アイテム購入のほか、コーディネートアプリ「WEAR」への投稿が、主に熊本地震で被災した子どもたちの支援につながります。



Gourmet Front

「食」を通じて子どもたちの栄養改善を支援

株式会社東急グルメフロントが運営する「しぶそば」にご来店のお客様1人につき、1円をご支援いただいています。集まったご寄付は、ベトナムの北部山岳地に暮らす少数民族の子どもたちの栄養改善のため、子どもたちへの栄養食の提供のほか、お母さんへの栄養指導や栄養研修などの活動に役立てられています。



Save the Children JAPAN
発行：公益社団法人　セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-4　山田ビル 4F
ご支援に関するお問い合せ：03-6859-0068（平日 9:30-18:00）　2016 年 9 月発行

難民の子どもたちの現実を知って！ 紛争を逃れる少女の続編動画を公開

セーブ・ザ・チルドレンはこのほど、紛争から逃れる中、故郷や家族を失う子どもたちの惨状を広く伝えるため、動画「Still the Most Shocking Second a Day（スティル・ザ・モスト・ショッキング・セカンド・ア・デイ）」を公開しました。

この動画は、シリア危機が3年を迎えた2014年3月に公開され、世界で5,000万回以上再生された前作「Most Shocking Second a Day」の続編になります。故郷、住む家、家族、教育を受ける機会－。多くを失う子どもたちの現実を知ってもらいたいとの思いで、セーブ・ザ・チルドレンは、欧州と中東で支援する子どもたちの話をもとに、この動画を制作しました。是非一度、ご覧ください。

動画の視聴はこちらから
https://www.youtube.com/watch?v=nKDgFCojiT8
または、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのウェブサイトから



STORY

主人公は、ロンドンに暮らす少女、リリー。前回の動画では、何不自由ない彼女の生活が、突然起きた紛争よって激変する様子が描かれました。今回、リリーは新たな生活を求めて英国を逃れます。しかし、彼女を待ち受けていたのは、危険で孤独な旅でした…。



募金にご協力ください

セーブ・ザ・チルドレンは、一人ひとりの子どもたちが抱える様々な問題に寄り添って活動を行っています。

例えば約3,000円で、栄養不良の子ども1人に6日分の食料を提供できます。

詳しくは同封のお知らせをご覧ください。

編集後記

裸足で、壁にもたれてコンクリートの床に座る12歳の少年。上の写真は、バングラデシュの駅で撮影された1枚です。「いつも路上で寝ているんだ」と話す彼のような子どもたちが、世界のどこかで取り残されることがないように。ニュースレターを通して、スタッフのそんな思いが伝わることを願っています。（編集担当：高橋）